

K450.8

1

師範國語要説

文部省

文部省調査局刊行課贈

第一級

目次

第一章 序説

一 國語

二 言語

三 國語の特色

四 國語の相違

五 國語の標準

六 國語の發達

七 國語の性質

八 國語の標準

九 國語の標準

十 國語の標準

十一 國語の標準

十二 國語の標準

十三 國語の標準

十四 國語の標準

十五 國語の標準

第三章 文字

一 日本に於ける文字

二 漢字

三 漢字假名

四 平假名・片假名

五 いろは歌

六 表記法

七 假名遣

第四章 語彙

一 語彙・單語

二 單語の構造

三 擬音語・擬態語

四 固有語・外來語

五 特殊語彙

六 新語の發生

第五章 文法

一 文法

二 文と「文節」

三 單語

四 活用

五 品詞分類

六 敬語

第六章 方言と標準語

一 方言

二 現代國語の方言區別

三 方言の沿革

四 標準語の性質

五 現代の標準語

第七章 現代文字言語の種類

一 音聲言語と文字言語

二 現代文字言語の種類

三 現代の口語と文語との交法上に於ける相違

第八章 國語の變遷

一 言語の變遷

二 口語の變遷

三 文語の變遷

第九章 結語

一 國語の發見

二 國語と國民性

三 國語の系統

四 國語の將來

師範國語要説

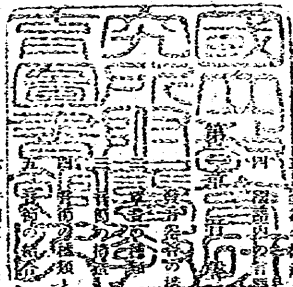
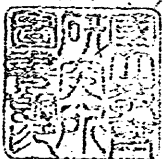
第一章 序説

一 國語

人類はすべて言語を用ひる。しかしこの言語は決して一樣なものではなく非常に多くの種類に分れる。われわれの用ひる日本語もこの數多い言語の一つである。

世界に存する國家にはそれぞれその國の代表的言語と認むべきものがある。これを國語といふ。わが國の國語は日本語である。一つの國家の領土内に二種類以上の言語の存する場合もあるが國家の中樞をなす民族の言語がおのづから國語としての位置を占める。わが國の中樞民族は日本民族であるから日本語が國語と認められてゐる。

第一章 序説



のである。

人類は社會生活をなす。この社會生活をなすに極めて有用なものが言語である。われわれの日々の生活が言語によつて支障なく営まれることは周知の事實であるが、また文化の蓄積普及、向上も言語の力に負ふ所が多い。諸般の教育も主として言語を通じてなされ文學に接して感奮興起し、豊かな情操を養ひ得るのも言語によつてである。

言語は右のやうな重大な働きをなすものであるから、國語に對する關心を高めることは大いに肝要なことである。國語の無自覺氣儘な使用は國語の歴史性社會性を無視することである。隨つてわれわれは國語に對して常に敬虔な態度を持ち、國語の正しく豊かな發達を念願としなければならぬ。

二、言語

言語は人類特有のもので、思想感情を發表傳達することを目的とし、音聲を材料として用ひるものである。思想感情を他に傳達する方法としては、

身振、手眞似、繪畫、信號等各種各様のものが有するが、中でも言語は非常に高度の發達を遂げて居り、微妙にして複雑な内容をよく表し得る。言語は音聲を用ひるものであるといつても、反射的に聲を出したり叫んだりするのは、通常言語とは考へられない。言語はある目的を達するため、有意的に發するものに限り、しかもいふまでもなく意味を伴ふものでなければならぬ。即ち一定の音聲に一定の思想が結び附いて、その音聲が思想を發す記號となり、その音聲を聞けば、その思想を思ひ浮べ、その思想が浮ぶとその音聲を發し得るといふやうになつてはじめて、言語は成り立つのである。その音聲と思想とは、聯想によつて結合するのであつて、如何なる音聲に如何なる思想を配するかは、社會的習慣としてきまつて居り、社會の異なるに従つて異なる。この音聲と音聲によつて發される思想、即ち言語の意味との二つは言語たる以上は必ずなくてはならないもので、音聲と意味は言語を形づくる二つの要素である。

言語が實際に行はれるには、話手と聞手とが必要である。さうしてこの

話手と聞手とは互に違つた二つのはたらきが行はれる。話手は思想感情を人に傳へるために口を動かして現實に音聲を發し、聞手の方ではその音聲を聞いてそれが表現する話手の思想感情を理會する。即ち前者は自己の傳へようとすることを言語に代表せしめて外に表すのであるから發表作用(又は表現)であり、後者は話手の傳へようとすることを受け入れて知るのであるから理會作用(又は解釋)である。

かやうに話手の發表作用と聞手の理會作用とによつて思想の傳達が出來、言語がその用を全うするのであるがしかし話手の傳へようとする所のものを、聞手が正しく聽らず、理會し得るのは話手も聞手も周囲の人からこれまで幾度となくその音聲を聞き、且つそれにはいつも一定の意味が伴なつてゐることを経験してその音聲の記憶と、その意味、即ちその音聲の指し示してゐる事物の記憶とが相伴なつて心の中に存してゐるからである。なほこの言語の理會には前後の事情や周囲の情景がこれを大いに助けるものであることを忘れてはならない。

文字

音聲は雜覺に訴へるものである。特殊の機械の助けを借りるのでなければ、通常その場で消え去り、永く保存することは出來ず、その音聲の違し得る範圍にしても限度がある。即ち音聲を以てしては時間的に又空間的に相當の制限を受ける。かかる音聲の有する缺點を補ふものとして用ひられるのが文字である。文字は、元來繪などのやうな視覺的記號として言語とは無關係に、思想傳達の一要具として發生したものに基づくものであつて、後に言語と結び附くに至り、言語の音聲意味を一定の文字によつて表すやうになつた。換言すれば、單なる視覺的記號に過ぎなかつたものが、今度には讀むことが出來るやうになつたのである。さうしてこの讀むことが出來るといふ一事こそ、文字をして他の視覺的記號と區別せしめる重要な特性なのである。かくして一定の文字を見れば、直ちにそれに對する言語の音聲及び意味を思ひ浮べるのである。

文字言語

文字による言語を文字言語といひ、これに對して専ら音聲による言語を

音聲言語

音聲言語といふ。

文字言語に於いては、その發表作用は、具體的に文字に書くといふ作用として行はれ、その理會作用は、文字を読むといふ作用として行はれる。この際、實際に口を動かして音聲を發すれば音讀となり、然らざれば默讀となる。さうして音聲言語に於いては、特殊の機械を用ひない限りは、この發表作用と理會作用が同時に行はれなければならないのに、反して文字言語の場合には、發表作用が行はれてから多くの時間を隔てた後でも、理會作用が行はれ得る。

言語が思想感情を互に通じ合ふ目的のために生れ、且つ用ひられるものであることは上述の通りであるが、しかし言語の用は、單なる思想感情交換の要具に止まるものではない。はじめ模糊とした思想感情も、適當な言語表現を得ることによつて明確な姿を呈して來ることや、思考感動を音聲や文字で表現することによつて、自らの思考感動の不備を悟り又は自らの思考感動の一層の進展を見ることが、しばしば經驗するところである。思考感動と言語とは切つても切れない密接な關係がある。従つて言語を異にする民族が、その思考感動の形式を異にするのは當然である。

三、國語の構造

言語はこれを外面から觀察してみると音聲の連続である。しかし、それはどこまでも連続するのではなく、ところどころ句切つて發音されるのが普通である。國語について見るに、櫻がちらほら咲きましたといふ言葉は、これを實際に發音した場合には、マジタの次で音聲の切れるのが普通であるが、サクラガで一旦切つて、テラホラサキマシタと續けることも出來、又テラホラで切ることも出來る。即ち、この言葉を實際に發音して出來るだけ短く句切つてみると、サクラガ—テラホラ—サキマシタと三つになる。しかし、これ以上句切つて發音することはない。さうして、このサクラガとか、テラホラとか、サキマシタとかいふものは、ある一定の意味を持つてゐるのであるが、更にこれをその意味には關係なく、音聲としてのみ觀て、通常の常識に従つて、實際の發音上出來る限り短く句切つて發音してみると、サク

音節

ラ、ガ、チ、ラ、ホ、ラ、サ、キ、マ、シ、タ、と十三に分つことが出来る。このやうな音聲の一節を音節といふ。即ち國語の音聲は音節より成り立つてゐるのである。さうして國語に用ひられる互に違つた音節は、決して無數にあるわけではなく、一定の數に限られてゐる。

單音

次に、いろいろの違つた音節を互に比較してみると、例へば「カ」(ka)と「サ」(sa)「タ」(ta)のやうに、そのどこかの部分に共通する所があつて、その異同に従つて更にいくつかに分けることの出来るものがある。それを出来るだけ細かく分けたその一つ一つを單音と稱する。即ち音節はいくつかの單音から構成される。中にはどうしても分解出来ない音節もあるが、その場合はただ一つの單音で出来てゐるものである。さうして國語に於いて用ひられる單音の數には限りがある。この一定の言語に用ひられるあらゆる單音を集めて組織立てたものを音聲組織といふ。なほ單音から音節を構成する方法にもあるさまりがある。

音聲組織

次に言語を意味に従つて分解してその構造を考へてみるに、實際に言語

文

によつてある思想を言ひ表さうとする場合、簡單に言ひ終るものもあるが、長く續くこともある。講演の場合の如きは非常に長く續く。しかし、この場合始めから終りまで一息に發音されるといふことはなく、どこどころ切つて息つぎをしながら續けられるのが普通である。この切れ目は、通常は意味の切れ目と一致してゐる。この切れ目の中場合によつては切つてもよく、切らずに續けてよい所もあるが、中に常に切れ目をつけて發音しなければならぬ所がある。例へば、東京は日ましに濃くなつて來ます櫻がちらほら咲き始めましたといふ言葉では、マス、の次と、マシタの次とでは、切れ目をつけるのが常である。この切れ目は、ある事柄を言ひ終つた所である。このやうにある纏つた思想を言ひ終つた所では、必ず音聲が切れるのであつて、その切れ目までの一続きの言葉を文といふ。即ち文は内容からいへばある纏つた思想を表すものであり、外形からいへばいつもその終りに音の斷止があるものである。多くの文は、更に中間でこれを切る事が出来る。サクラガサチホラサキマシタの如きものにしても、この切り方に

文節

はいろいろあるが出来る限り多くの句切りを附けて細かく切つてみると「サクラガ一チヲホラ一サキヤシタ」の三つとなつて文に即して言語を考へた場合にはこれ以上句切ることが出来ない。このやうな一句切りは實に文を構成する最小單位といふべきものであるがこれに對する名稱はいろいろあつて未だ一定してゐない。ここでは假に「文節」といふ名稱に従つておく。「いいえ」行けなどの如く文の中にはその中間で句切ることの出来ないものがある。これらは一つの「文節」で出来てゐる文である。

單語

次にこの「文節」はこれをいくつか並べてみると中には互に共通した部分の認められるものがある。例へば「櫻が咲きました」「櫻の花です」などの文に於ける「櫻が」といふ「文節」について観るとそこには「櫻」といふ共通した部分が見られる。又「櫻が咲きました」「山がきれいです」などの文に於ける「櫻が」「山が」といふ「文節」では「が」といふものが共通してゐる。このやうに互に共通点のある「文節」を並べてそこから抽出されるものが「單語」である。このやうに「文節」は「單語」から構成される。「文節」にはこれ以上分解出来ないものが

語彙

あるがこれは「文節」が一つの「單語」で出来てゐる場合である。従つて「いいえ」「行け」などの文は結局一つの「單語」で出来てゐる文といふことが出来る。「單語」は一切の事物を言ひ表す基礎となるものであつてその数が多くその意味も外形も種種様様である。この「單語」を集めたものを「語彙」といふ。

（語彙を登録したものが辭典である。）
以上の如く文を文に即して分解した場合の最小單位は「文節」であり、このやうな「文節」を基にしてわれわれの脳裏で抽出された單位が「單語」である。従つて文を構成する直接の單位は「文節」であつて「單語」ではないけれども「單語」は文を構成する場合の材料であるといへる。實際に言語を用ひてある語つた思想を言ひ表さうとする時、多くはわれわれの脳裏に貯へられてゐる「單語」（これは個々の思想を表すものである）をいくつか適當に組み立てて一つの文として發表する。一方聞手の方は文を組み立ててゐる個々の「單語」を順順に聞いてその「單語」の姿、個々の思想をたよりとしこれを綜合して「話手」の傳へようとする姿、思想を了解する。以上のやうなわけであるか

文法

ら、あらゆる言語は、實際にこれを用ひる場合には、すべて文として現れるのであるが、一面から見れば、あらゆる言語は、單語であるといふことが出来る。文は單語を材料として構成される。さうして、文全體の意味は、文に用ひられたすべての單語の意味によつて定まる。しかし、單語をただ集めただけでは、單語の意味が結合して一つの纏つた意味を有する文にはならない。ある一つの纏つた意味を表すやうにするためには、一定のまゝりに従つて單語が排列され、結合されなければならぬ。この文を構成する場合のまゝりが、即ち文法である。(文法を記したものが文典である。)

以上のやうに、言語の構造を音聲と意味との二つの面から觀察してみると、音聲に關するものと單語に關するものと、文に關するものと、この三つの部面のあることが知られる。又、文字言語に於いては、このほかに文字に關するものがある。従つて、言語に對して觀察をなす場合にも、これらの部面に分つて考察するのが便利である。

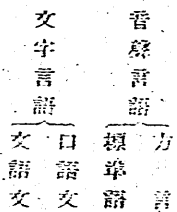
四 國語内の言語の相違

國語と一口に唱へてあるものがすべて一様であつて、少しも違ひがないかといふに、決してさうではなく、現代の國語について見ても、種種の言語の相違が見られる。先づ土地による言語の違ひがある。この土地土地によつて異なる言語を方言といふ。即ち國語には多くの方言が存する。この各地方に行はれる方言に對して、全國共通に用ひられるものとして標準語がある。又、職業階級の相違、男女老幼の差等によつて、それぞれ特色をもつた言語が行はれてゐる。これらは、概していへば、語彙の點に差異が見られるのであるが、中でも方言相互の差異は最も著しく、音聲や文法の點でも異なる所が少なくない。さうしてこれらの言語は、それぞれ、或は地域的に、或は社會的に、ある限られた範圍に行はれるもので、それぞれの言語のもつ特徴は、同時にそれを話す人の屬する特殊の社會の標幟となるものである。(唯標準語だけは國語の行はれる全範圍に及ぶものである。)

以上舉げたものは、談話に用ひる言語、即ち音聲言語に見られる種種の言

口語文
文語文

語であるが文字に書く場合の言語即ち文字言語にも種類の言語がある。文字言語はこれを大別すれば現代の標準語に基づく口語文と文字に書く場合の言語として古くから傳はつて來た特殊の言語である文語文とがあり、更に文語文には普通文書簡文(候文)漢文などがある。これらの文字言語に於ける各種の言語は、それぞれ互に相違があるのであるが、殊に口語文と文語文との間には語彙の違ひのほかに著しい文法の違ひがある。又文字に書いた形にも相違のあるものがあり、殊に書簡文漢文などは獨特の書き方をするのが普通である。これら現代國語の種類を表示すれば次の如くならう。



方言は地方的個別的のものであるが、標準語及び口語文文語文は全國的

口語・文語

般的のものである。口語文は標準語に基づいたものであるから、口語文と標準語とを一括して口語とよび、これに對して文語文を文語といふことがある。

以上の如く現代の國語に各種の言語があるが、使用する人を中心として考へてみると、同一人がこれらすべての言語に通曉してゐるといふわけはない。しかし、自分の土地の言語のほかに、標準語を語り、口語文や文語文を読み、書簡文を書くといふ風に、數種の言語に通じてゐるのが普通である。但し、自分の土地の言語は知らず識らずの中に覺えてしまふものであるが、その他は意識的に學んではじめて知ることの出来るものであり、多くは學校教育によつて與へられるものである。

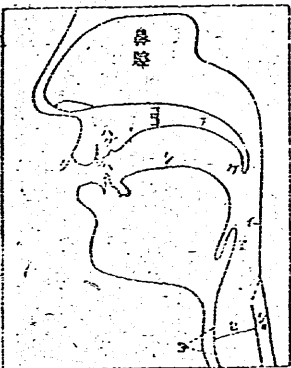
なほ國語には、時代・時代による相違がある。例へば、古事記や萬葉集の言語、源氏物語や枕草子の言語、保元・平治平家物語の言語、謡曲や狂言の言語、淨瑠璃や歌舞伎脚本の言語などを較べてみるならば、そこには互に少からぬ差異があつて、時代によつて如何に言語が變化するかが分るであらう。

このやうに同じ國語でも、その中に種類の相違があるのであるが、この種類の言語を全然別のものとは考へずに、いづれも國語であると考へてゐる。それはこれらの言語が日本人の用ひるものであるといふやうな常識的判斷のみに基づくものではなく、その根柢には儼然たる言語上の事實が横はつてゐるからである。即ちこれらの種類の言語は、互に違つた點が少くないにしても、大體に於いて一致や類似が多く、根本に於いて共通した性格を有するものであることは疑ひないものであつて、畢竟その差異は根本的なものではなく、同種のものの変異であり、同一のものの変形であると見るべきものなのである。

第二章 音 聲

一、發音器官の構造並びに作用

言語が音聲を外形とし、意味を内容とするものであることは、前に述べた通りであるが、音聲は語をする側からいへば人間の發音器官によつて發せられるものであり、これを聴く方からいへば聽音器官によつてとらへられるものである。發音器官はその装置に對して特別に説明することを與しないが、發音器官の方は少しく説明を加へる必要がある。



第二章 音聲

レ コ イ エ リ ケ ナ コ ヲ ハ ク
 全 喉 聲 咽 舌 口 喉 喉 頭 氣 管 肺 腹
 腔 頭 腔 腔 腔 腔 腔 腔 腔 腔 腔 腔 腔 腔

呼吸を利用するもので、その

氣流にいろいろの變化を興へて諸種の音を發するのである。發音する際に用ひる諸器官の中、主なものを次に擧げる。

喉頭

聲帯

(イ) 喉頭並びに聲帯 喉頭は氣管の最上端にあつて特別の一區劃をなしてゐる小さな室のやうなものである。まうしてこの喉頭の室の中には、左右の壁から張り出した一對の棚のやうなものがある。これが聲帯である。聲帯は主に筋肉から成り立つてゐて軟く、縦横に動く。左右から張り出した棚の間に隙間を作ることにも出来るし、密着させることも出来る。(聲帯の作る隙間を聲門といふ) この聲帯は吐き出す息によつてそのへりが振動を起し、その振動によつて空氣に疎密の波動を作り、一種の音を出す。(この場合の聲帯の状態を發聲聲門といふ) この音は所謂樂音に屬するもので、これをこゑといふ。こゑは聲帯の張り方や息の出し方の強弱によつていろいろに變化する。聲帯を緊張させた場合は、調子の高い音が出ゆるめた場合は、低い音が出る。又息の出し方が強ければ、高くて強い音が出、出し方が弱ければ、低くて弱い音が出る。又聲帯が長ければ、低く、短ければ、高い。

咽頭

次に聲帯の隔の隙間を小さくして(この場合のを氣管聲門といふ)呼吸を導くと、一種のこすれた音が出る。これを氣音又は聲門音といふ。なほ喉頭全體は、一種の共鳴室の役目をもする。

(ロ) 咽頭 喉頭の上部に咽頭がある。咽頭の下部は、喉頭を通して氣管、氣管支肺に至る道と、食道から胃に至る道とに分れる。又上の方は、一方は鼻腔に通じ、一方は口腔に通ずる。口へ入れた食物が、氣管へ行かずに食道へ行くやうにするため、舌のつけ根の奥の方に、自由に動くことの出來る會厭といふものがある。この會厭は、又こゑに一種の響を興へる役目もする。なほ咽頭全體は、一種の共鳴室のはたらきをする。

口腔

(ハ) 口腔 咽頭から外部へ通ずる一つの通路が口腔である。この口腔は、それ疊體が共鳴室の役目をするほか、この中には發聲器官として重要な役目をするものがたくさんある。即ち唇齒、齶舌等である。これらの中、唇齒、齶等については特別の解説を必要としないが、顎は上顎と下顎とより成り、動くのは下顎の方で、これによつて口をあけたてする。上顎の内部は

顎口蓋
軟口蓋

大體丸天井の形をなしてゐる。これを口蓋といふ。口蓋の中くちもとに
近い半分は内部に骨があつて硬い。これを硬口蓋と名づける。奥に近い
半分は内部に骨がなくて柔い。この部分を軟口蓋といふ。軟口蓋の末端
には肉片が透れ下がつてゐる。これを懸壺垂(のどひこ)といふ。懸壺垂は
一種のふるへ聲を出すのに用ひられる(但し咽喉では用ひない)。舌は發音上
最も重要なものであるが、柔軟であつてよく動き、従つてその形も種種様
に變る。發音を説明する必要上、舌の裏面をいくつかに區分する。奥の方
即ち軟口蓋に向ひ合つてゐる部分を後舌面前の方即ち硬口蓋に對する部
分を前舌面中央を中舌面と名づける。又前舌面の中舌の突端を常に舌尖
といふこともある。

後舌面
前舌面
中舌面
鼻腔

(二) 鼻腔 これも咽喉から外部に通ずる一つの通路であるが前に述べ
た軟口蓋と懸壺垂とはこれを裏へ引込めると少し持ち上つて咽喉の後の
壁に密着し、鼻腔への通路をふさいでしまふ。従つて肺から出た空氣は鼻
腔へ行かずに口腔へ流れる。普通の發音はこの状態で發せられるのであ
る。このやうに鼻腔は主として共鳴室の役目をする。

有聲音
無聲音

四音位置

以上の如き諸器官が働いて音を發するのであるが、こゝるを用ひるか否か
で有聲音と無聲音とに分れる。この有聲音又は無聲音が唇齒舌等によつ
て變化を受けて、種類の音となつて現れるのである。この各種の音を作る
ことを調音といひ、音を作る場所を調音位置といふ。

二、單音の種類

言語に用ひる音聲の最小單位は單音である。單音は母音と子音とにわ
かれる。母音は有聲音であるが、子音には有聲音(有聲子音)と無聲音(無聲子
音)とがある。

母音

(イ) 母音 母音は聲帯を振動させて生じた。こゝが、口腔内の諸器官によ
つて、何らさへざられることなくして發せられたものである。さうして口
腔内の形及び大きさによつていろいろの種類が出来る。この形及び大き

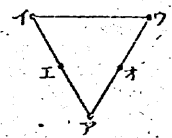
さは、主として口の開け方と舌の動き方によつて作られる。殊に母音の發音に最も決定的なものは、舌の位置であるから、母音の種類を次の如く大別することが出来る。

- 一 前舌母音 軟口蓋と前舌とが接近する。(兩側では接觸する)
- 二 後舌母音 軟口蓋と後舌とが接近する。(同)
- 三 中舌母音 軟口蓋の前部と中舌とが接近する。(同)

母音には特に唇をまるめて發音するものがある。又母音を長く發音した場合、これを長母音といひ、二つの母音が重なつて互に密接に結び附いてゐる場合、これを重母音といふ。又母音を發する時は、軟口蓋が持ち上つて咽頭の後壁に附着し、鼻への通路をふさいでゐるのが常であるが、もしふさいだ方が不十分であると、鼻ごゑの母音が出来ゑる。これを鼻母音といふ。現代國語の標準的母音は、アイウエオの五つである。アイエは前舌母音、アウオは後舌母音である。アは口を大きく開き、舌は大體平らである。これを[a]で示す。イは前舌面が硬口蓋に向つて高まり、口の開き方は小さい。

これを[i]で示す。ウはイと同様、口の開き方は小さいが、後舌面が高まる。

[u]を以て示す。但し、[u]は屢ある外國語に見られるやうな唇をまるめて出す音を表すのに用ひられるため、自然の唇の位置で發音される國語のウは[u]を以て示すことがある。エはイとアとの中間音で、[e]、オはアとウとの中間音で、[o]で表す。これら母音相互の關係は上の如き圖式で示すことが出来る。なほ地方によつては、エとアの中間の音、オとアの中間の音、曖昧なイウ、或は鼻母音等の用ひられることがある。



の音、曖昧なイウ、或は鼻母音等の用ひられることがある。(ロ) 子音 子音は、呼吸が發音器官のいろいろの部分でさへぎられて生ずるものである。そのさへぎり方は、氣流の通路をせばめるか又は全く閉ぢるかであるが、これらの場合、呼吸の流れ方によつて子音を次の如く分けることが出来る。

- 破裂音 閉鎖によつて一旦とめられた氣流が閉鎖を破つて急に出る時發せられる音。
- 摩擦音 著しいせばまりを氣流が無理に通過する時に發せられる音。

破裂音 同じ調音位置に於いて破裂と摩擦とが密接に相ついで行はれて發せられる音

以上はすべて氣流を専ら口より出すものであつていはば口音であるがこれに對して口腔内のどこかの部分で氣流をさへぎつてこれを口から出さずに鼻から出す場合がある。これを鼻音といふ。

又どこで呼氣がさへぎられるかによつて即ち調音位置によつて次の如く分けることも出来る。

兩唇音 上下の唇でさへぎられる。

齒音 舌の前部と上齒又は上の齧とで。

硬口蓋音 硬口蓋と前舌面とで。

軟口蓋音 軟口蓋と後舌面とで。

聲門音 聲帯で。

現代國語に用ひられる標準的の子音を以上の二種の分類を經緯として表示すると次の通りである。

聲門音	軟口蓋音	硬口蓋音	齒音	兩唇音	鼻音		口音		
					無聲	有聲	破裂音	摩擦音	聲門音
			n	m					
	ŋ								
	k		t	p					
	g		d	b					
h		(ç)	s	(f)					
		j	z	w					
			ʃ						
			ts						
			tʃ						
			dz						
			dʒ						

注意—括弧で囲んだのは特殊の場合に現れるものである。

[m] ㄇ行の子音として現れる。又アンマ(按摩)デンバ(電波)サンバ(三羽)等に於けるンもこの音である。又「うま」(馬)「うめ」(梅)の「う」に當るンも [m] で

ある。

[p] バ行の子音として現れる。

[b] ベ行の子音として現れる。

[f] フカイ(深い)フタヌ(二つ)等の語に於いて、フの子音がこの音で發音されることがある。

[w] ワの子音として現れる。

[n] ナ行の子音として現れる。又ユンナン(困難)デントウ(電燈)サンダイ(三葉等)に於けるンもこの音である。

[t] タ、テ、トの子音として現れる。

[d] ダ、デ、ドの子音として現れる。

[s] サ、セ、ソの子音として現れる。

[z] ザ、ゼ、ゾの子音として現れる。又ズとヅの假名は全國の大部分で同音に發音されるが、その際或る地方ではこの兩者とも[ʒ]で發音する。

[ʃ] シ及びシャ、シユ、シヨの子音として現れる。

[ʒ] シとヂ、シャ、シユ、シヨとヂヤ、ヂユ、ヂョは全國的に見て同音に發音する所が多く、その際或る地方ではこれらの假名をすべて[ʒ]で發音する。

[ts] ツの子音として現れる。

[dz] ズとヅの假名を同音に發音してゐる地方の中、東京その他の地方ではこの兩者をいづれもこの音で發音する。又ザ、ゼ、ゾがこの音で發音されることもある。

[tʃ] チ及びチャ、チュ、チョの子音として現れる。

[dʒ] ジとヂ、ジャ、シユ、シヨとヂヤ、ヂユ、ヂョが同音に發音されてゐる地方の中、東京その他の地方ではこれらの假名をいづれもこの子音で發音する。ラ行の子音として現れる。この音は舌のへりが上の齦に軽く著いて離れる際に生ずるものであつてその音の性質が[tʃ]の場合に似てゐるので、前の圖に於いては、便宜上[dʒ]と同じ體に收めた。

[ʈ] ヒト(人)などの語に於けるヒがこの音で發音されることがある。

[j] ヤ、ユ、ヨの子音として現れる。

[b] ガキグゲゴ(カ行鼻濁音)の子音として現れる。又デンキ(電気)サンガイ(三階等)のンもこの音である。

[N] ホンアン(餽案)デンソ(電話)ホンヤク(餽譯)ホンソオ(奔走)などに於けるンはこの音である。又ソの所で言ひ切りになつて他の音に續かない場合も、多くはこの音で發音される。この音と[u]とは似てゐるが、[N]の方は後舌面が軟口蓋に密着せず、少し隙間を残して發音される。

[k] カ行の子音として現れる。

[g] ガ行の子音として現れる。

[h] ハ行の子音として現れる。

三、音節の構造

國語に於いて普通に用ひられる單音の數は、母音子音を併せて約二十七日ぐらゐであり、これらの單音が結合して音節をなすのであるが、わが國の音節の構造としては、音節中に一つの母音を含むものと、母音を全く含まない

ものとがあり、母音を含むものには次の様な種類がある。

- (イ) 一母音で出来てゐるもの ア[a] イ[i] ウ[u] エ[e] オ[o]
- (ロ) 一子音と一母音で出来てゐるもの カ[ka] シ[si] レ[re]
- (ハ) 二子音と一母音で出来てゐるもの キヤ[kja] ニュ[nju] ビョ[byo]

母音を含まずして一音節をなすものは、ラッパ(喇叭)ザッシ(雜誌)イッサイ(一切) イッター(體)イッチ(致)ガッコオ(學校)などに於ける促音の部分と、サンヤイ(三枚)ハンガイ(反對)サンガイ(三階)デンソ(電話)などに於けるソの音節も撥音の部分及び、うま(馬)などといふ語の頭に見られるンである。しかし諸種の音節中の大部分は母音を含むもので、しかも母音で終るものであり、その中でも一子音と一母音との結合といふ構造の音節が最も多い。

又母音は元來有聲音であるが、それが無聲音に發音されることがある。東京語でキシヤ(汽車)クツ(草)ツキ月(ヒト)人)フカイ(深い)イップク(二眼)等のキ、ク、ツ、ヒラ、プの部分について觀察してみると、口腔の形は普通の[i][u]といふ母音を發する時の形をなしてゐるが、その時聲帯は少しも振動してゐない。

師範國語要説

文部省

文部省調査普及刊行課寄贈

(第二級)

Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 25, 1946)

昭和三十一年三月三十日
文部省検査済

著作権所有 発行所 文部省

師範國語要説
定価金壹圓

印刷者

東京都神田區錦町一丁目十六番地
師範學校教科書株式會社
代表者 森下松衛

印刷者

東京都京橋區入舟町一丁目十一番地
新井修平
代表者 新井修平

發行所

東京都神田區錦町一丁目十六番地
師範學校教科書株式會社